

# たん暖たてやま

2018

12 / 1



館山海軍航空隊 入壕者30万人到達  
赤山地下壕跡



# 「赤山地下壕跡 平和学習 観光資源として定着

## 課題は次の世代への引き継ぎ

平和学習として多くの人が訪れる館山海軍航空隊「赤山地下壕跡」の入壕者が30万人に到達しました。地下壕跡は、自衛隊基地の南側にあり、2キロメートル近い地下壕と巨大な燃料タンク跡などが残る全国的にも大きな壕で、館山市を代表する戦争遺跡のひとつです。建設時期は不明ですが、「昭和10年代初めに建設が始まった」という説と、「昭和19年以降に館山海軍航空隊により掘られた」という複数の証言があります。壕内には発電所跡や病室、通信室があったなどの証言から、全国的にも珍しい航空要塞的な機能をもった地下壕だったと推測できます。

平成16年4月に一般公開が始まり、翌年、戦争遺跡として初めて市指定史跡になりました。

戦後70年（平成27年）の節目に新聞・テレビ等で紹介されると、入壕者が大幅に増加しました。今では、平和学習の拠点だけでなく、観光資源としても定着しています。

今年8月には、初のコンサートを実施。壕内には、フルート奏者でふるさと大使の深津純子さんの美しい音色が響き、集まった聴衆は、幻想的な地下壕の新たな魅力を体感しました。

30万人目となったツアーの参加者は「ガイドの説明を聞くと「現代の日常生活では想像できないことが、戦時中に行われていたんだなあ」と思い、戦争の脅威を感じました」と話しました。

ガイドを行うNPO法人安房文化遺産フォーラムの愛沢伸雄代表は「30万人達成は感慨深い。戦争経験者が減っていく中で、戦争を伝えるのは、当時の『もの』を観て学んでもらうことが大切。歴史的に貴重な資源を、どうやって次の世代に伝えていくかが課題ですね」と思いを話してくれました。



ガイドの説明を聞くツアー客

### 赤山地下壕跡

- 入壕料…一般200円 小・中・高生100円
- 休壕日…毎月第3火曜、年末年始
- 開壕時間…9時半～16時(受付15時半まで)
- 問合せ…生涯学習課 22-36988



### シリーズ 館山の近代

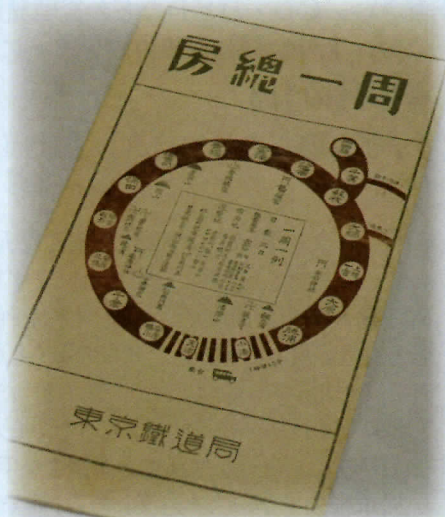
資料が語る、  
②8 鉄道がやってきた

那古船形駅ができてから、今年でちょうど100年になるのをこ存じでしょうか。那古船形駅の開設は大正7年(1918)で、安房北条駅(現在の館山駅)は翌8年、九重駅は同10年に開業しています。大正元年(1912)に蘇我一姉ヶ崎駅間で運行を開始した鉄道「木更津線」は、徐々に南へ延伸し、大正7年に那古船形駅まで達しました。翌年に安房北条駅まで達したところで「北条線」と改称。その後も延伸を続け、大正14年(1925)には安房鴨川駅まで達しています。一方、房総半島の東側を走る鉄道「房総線」は昭和4年(1929)に安房鴨川駅まで開通し、北条線は房総線に編入され循環鉄道となりました。

鉄道が開通する以前、房州と東京を結ぶ主な交通手段は汽船でした。

明治11年

(1878)に就航した汽船は、東京の霊岸島(現在の中央区八丁堀付近)と館山を約5時間で結び、大量の物資と旅客の迅速な移動を可能としました。市内には船形・那古・北条・館山の4か所に汽船場が置かれ、その周辺が問屋や旅館などで賑わいました。



東京鉄道局発行の観光ガイド

汽船にとって鉄道の登場は強力なライバルとなりました。昭和3年(1928)の記録によれば、東京・北条・館山間の汽船は所要時間約4時間半で運賃は片道1円80銭、鉄道は両国橋(安房北条間で所要時間約4時間半で運賃は3等料金1円88銭)であり、所要時間・運賃ともに互角の争いだったことが分かります。

遅れて登場した鉄道は、旅行客に対して汽船とは異なる魅力を提供していきまます。それが、房総一周旅行の提案でした。写真の資料は、当時、国有鉄道の管理運営等を行っていた鉄

道省の地方局である東京鉄道局が、昭和2年(1927)に発行した観光ガイドです。

表紙には旅行の例として、各地の名所を巡り、鹿野山・鋸山・清澄山のうちいずれか一つに登る2泊3日のプランが紹介されています。房総半島を一周し、各地で下車できるといいますが、汽船には無い最大のメリットであり、魅力だったのでしょう。

鉄道の開通により、旅行客が多く集まる駅周辺には旅館や商店が立ち並びようになり、賑わいの中心となっていました。

### 博物館の休館日

- 本館・館山城(12月3日、10日、17日、25日、29日、31日)
- 渚の博物館(12月17日、31日)
- ※年末年始の休館日は次号でお知らせします。

